

Surgery の 10 章 Wounds and Contusions の項を見るに  
nature は physician of wounds (じやんせんとく) Every limb  
has its own healing in itself; Nature has her own doc-  
tor in every limb. などの言葉がある。このように「自然良  
能」「医ハ自然ノ臣僕ナリ」の思想は阿知波氏の言われる  
如く、時代とともに使用のされ方に多少の変化はあったと  
しても医学の底流には常に存在したものと生まれ、このこ  
とは三木氏が『医師の誓詞』の最初に挙げられた所以でも  
あろう。

ところが最近の医学には「医ハ自然ノ臣僕ナリ」の思想  
が薄れつつあるようで、世は先端医療の追求に營々とし臓  
器移植だ人工臓器だと一面華やかではあるが神を恐れぬ振  
る舞いが無いとしない。「医ハ自然ノ臣僕ナリ」を今一度  
思い起こす時と考えるのであるが、如何であらうか。

(広島県立身体障害者リハビリテーションセンター)

## 41 日本における「変蒸」の変遷につい て

広田 暉子

変蒸という概念はすでに『諸病源候論』(六一〇年)にみ  
られる。変蒸でもって生まれた子供の気血が長じ、五臓が  
改められると考えられた。変とは上気のこと、蒸とは体熱  
のことで、変蒸には軽重がある。軽いものは体が少し熱し  
て驚する。耳は冷えて尻も冷え、上唇には白泡がおこり、  
目は死鳥の目のようになる。少し汗が出る。早いもので五  
日、遅ければ八日から一〇日で止む。重いものは体が壮熱  
し、脈は乱れ、食欲なく、食すれば嘔吐するが苦しまな  
い、といったもので、生後三二日、六四日、九六日といっ  
た具合に変したり変蒸したりするとある。

『千金方』や『外台秘要方』にも大体同様なことが小兒  
門に載っている。

日本で現存する最古の医書である『医心方』（九八四年）でも変蒸については『諸病源候論』から引用している。治療法も黒散、紫丸方といった、『千金方』や『外台秘要方』に出ている方剤の他に黄芩湯を載せている。

鎌倉時代に著された『万安方』の小児門にも変蒸の項は有る。『幼々新書』を介して、多くの中国の医書からの引用があり、『医心方』と同様な変蒸についての概念の説明がみられるが、その他に錢乙の引用として、変ずる毎に腎、心、肝、肺、脾といった五臓や腑を生ずる、といったことが書かれている。

これは時代を反映して五行論をとり入れたものと思われる。治療法も黒散、紫園の他、柴胡散、清心湯、匂気散などを挙げている。

『万安方』よりも約五〇年後に著された『福田方』（一三六三年）では、変蒸についても記載は簡単である。

三二日で一変、六四日で二変、以下一〇変までを挙げ、それぞれの變によって五臓などが生じるとしている。また、傷寒との鑑別をすべきであるとして、傷寒の発熱では耳や尻も熱する、とある。治法は述べていないのも特徴的

である。

室町時代の田代三喜の代表的医書である『三婦廻翁医書』全九冊のうちの八冊目に納められている『小児諸病門』にも変蒸についての項目がある。成長過程で一〇度の変蒸が起こるとしており、これを煩症として捉えている。少煩の証ならば薬治には及ばないが、風が加わっていれば陳皮、香附子、前胡、升麻、柴胡にて風を去り……といったことが書かれている。虫のためであれば驅虫剤を、といった具合に、治療は具体的である。

室町時代後期に相当する時代に曲直瀬道三によって著された『退齡小児方』（一五六八年）も変蒸に十変五蒸がある。変蒸の毎に胎毒散じて精神意智生ず、としているが、むやみに治療すべきでない」と記している。

江戸時代初期に著された『古今幼科摘要』にも変蒸の項があり、三二日毎に発熱したりするとして、これは小児で骨脈臟腑と神智とが長ずるためにおこる、としている。処方是中国の医書から一〇足らずを引用しているが、柴胡が入ったり、人参の入った処方が多く、汗下の剤は少い。

また、同じ時代に名古屋玄医による『医方問余』が著さ

れており、この小兒門にも変蒸の項目がある。しかし、こ

こではじめて変蒸を薬治することに疑問を感じるといったことが書かれている。

江戸時代初期に書かれた『保嬰三方』（一六九四年）にも変蒸を治すための方剤が三つ挙げられている。処方内容をみる限り、人参などの補す薬が入っており、大黃や巴豆といった強い薬は入っていない。

江戸時代中期には吉益東洞のような獨創性に富んだ人物が出た時代だが、安藤昌益もその時代の人であった。変蒸という言葉はみられないが、じょう孕熱、じょうかん孕寒という言葉がそれに相当するようにも思われる。初生二、三カ月のあいだに熱するのを孕熱といい、胎中で母の血熱が影響したためと述べて処方も挙げている。孕寒についても同様に寒冷を發するものだ、と書かれている。

江戸時代後期になると、『医事小言』、『提耳談』、『保嬰須知』、『内科秘録』にはほとんど変蒸についての記載はなく、『校正方輿輦』でも変蒸という概念に批判的な考えが述べられている。

このように、江戸時代になると、変蒸という概念は批判

され、後期にはとりあげられなくなる傾向にある。

（睡小兒科内科）